どかんと弾けりゃ

〈登場人物〉
嫁（1場では娘）
母親
庄屋
息子
姑
馬方1
馬方2
馬方3
芸人一座の座頭（実は盗人の親玉）
一座の芸人たち（実は盗人たち）
村人1
村人2
村人3
村人たち

1

娘（2場からは嫁と表記）の家。
娘と母親。
その向かいに縁談の申し込みにきた庄屋とその息子。
庄屋と母親が話している間、後に控えている娘と息子は口をはさまず、見つめあっている。ときどき娘は恥ずかしそうに下を向く。

庄屋　というわけで、うちの息子がこちらの娘さんに一目惚れ。どうしても嫁にもらってくれということで、こうして参上したのだが。

母親　それはそれは、どうも。

庄屋　だが、いったいどんな娘さんか親は心配だ。それで甚だ失礼とは思ったが、近所に評判を聞いてまわった。すると、まあ十

人が十人とも口々にほめそやす。どんなに出来た人でも一人ぐらいは意地の悪いことをいうものだ。それが誰一人、こちらの娘さんを悪く言うものはいない。器量がいいのは見れば分かるが、世の中には見た目ばかりで性根のよくない者もいる。皮は白いが腹の中の餡が黒い饅頭のよう娘もいるのだが、こちらは裏表はないし、気立てがよく、そのうえ働き者で何でも器用にこなすし、信心深くなかなかのしっかり者だと。まあそんな出来た娘さんが今まで縁付かなかったのは奇跡。というより、お眼鏡にかなうお相手があらわれなかったということですかな？

母親　いえいえ、そんな。

庄屋　いやいや、これほどの娘さんなら親が高いところを望んでも無理はない。だがそうなると、わしのところではお話になりませんか？

母親　とんでもない。身のほど知らずのことは考えておりません。それに、ずいぶんとほめていただいたが、娘はそれほどのものではありません。

庄屋　いやいや、実に美しい娘さんじゃ。若ければ、このわしが嫁にほしいくらいですぞ（笑）。まあ、それは冗談だが、どうかひとつ考えてくださらんか。

母親　はあ、ですが……。

庄屋　先約があるのですかな？

母親　いいえ。

庄屋　では是非とも考えてくだされ。手前の息子も、親の欲目と笑われようが、この通り親に似ぬ男前だし、気持ちのやさしい子だ。他人様は鳶が鷹を生んだなどといってくださる。そう不足があるとは思わんのだが。

母親　とんでもないこと、不足があるなどと思っておりません。もったいない話でございます。不足のあるのは、こちらの方でございます。

庄屋　なんの不足があるものか。こちらは是非にと思っておるのに。

母親　いえ、それが……その……。

庄屋　ええい、埒があかんな。ここが気に入らぬからといってくれれば諦めもつくし、かなえる方策もあるやもしれぬではないですか。

母親　この縁談が気に入らぬのではございません。ほんとうにほんとうにそうではございませんが……この娘には、どうにも悪い癖がございまして。

庄屋　悪い癖と？

母親　はい、お恥ずかしい話ですが。

庄屋　それはどんな癖なんで？

母親　はあ、それをお話するのもはばかれるようなことですので、どうかお許しください。

庄屋　ふうむ、そう言われると余計聞きたくなるのが人情だ。それは、その……人の物を盗るとか。

母親　いいえ、そんな手が後にまわるようなおそろしいことではありません。

庄屋　では男とすぐにねんごろになるとか。

母親（怒って）　娘はそんな、ふしだらではありません！

庄屋　それでは、夜になると行灯の油をなめるとか。

母親　うちの娘は、化物ではありません！

庄屋　ではなんですか、その悪い癖とは。

母親　それが。

庄屋　どうか、もったいぶらずに教えてくだされ。このままでは引き下れませんぞ。

母親　では申し上げますが……よそへはふれまわらんでくださいますな。

娘（母親の袖をひいて）お、おっかさん。

庄屋　もちろんです。

母親　笑わないでくださいますな。

庄屋（少し苛立って）笑うものか、約束しますぞ。

母親　ほんとうに。

庄屋　ほんとうに。

母親　ほんとうに。

庄屋（半分怒りながら）　ほんとうに！

母親　では申し上げます。うちの娘はよく、おならを（小さな声で）落とすのです。

庄屋　はっ？　よく聞き取れなかったのですが、何を落とされると？　財布ですか。

母親　いえ、（いいにくそうに）おならを。

庄屋　えっ？　何とおっしゃた。もう少し大きな声で。

母親　おならを。

庄屋　は？

母親　おならです。

庄屋　えっ？

母親（自棄になって大声で）おならっ。

庄屋（とびのいて）ああ、びっくりした。そんな大声でなくても……あの、いま、おならと、おっしゃいましたか。

母親うなずく。娘、驚いた表情の息子の顔をみて下を向く。。

庄屋　おならというと、あのおなら？　お尻から出る。

母親　お尻でなくてどこから出るんです。

庄屋　つまり、屁ですな。

母親　は、はい。

庄屋　ふうむ、屁とはな。

母親　お恥ずかしい話で。

庄屋、笑い出す。

母親　笑わぬといったではないですか！

庄屋　いや失礼、失礼。それで、何か不都合でも？

母親　ですから、娘はおならを。

庄屋　するのでしょう。わしもしますぞ。よくします。しょっちゅうします。特に朝の一発、これが大事でな。それで体の具合が

よくわかる。元気のないのが出たときは一日調子がよくない。（母親に）あなたは、しませんか？

母親　そりゃ……わたしだって。

庄屋　するでしょう。わしの女房だってしますぞ。息子だってする。（息子に）なあ、するだろう？

息子　はい、します、します。もう、おならは大好きですから。

庄屋（笑いながら）　大好きでなくてもいいが。とにかく人間、誰だってするのです。決して恥ずかしがることじゃない。おたくの娘さんだって、人形じゃないのだから、おならくらいするのはあたりまえ。それを悪い癖などとは大仰な。

母親　しかし、うちの娘のはちょっと。

庄屋　ちょっと違うというのですか。なんの屁に違いがありますものか。屁は屁だ。屁とかおならとか言われるたびに、娘は小さくなる。

母親　あの……。

庄屋　まったく、屁のような話とはこのことだ。そんな理由でことわられるのでは合点がいかない。それとも、ほかにまずいわけがあるのですかな。

母親　いえ……しかし。

庄屋　いや、正直なところ今の話を聞いてわしも安心したのじゃ。非のうちどころのないというのも、考えれば気味の悪いものだから。

庄屋の歌う。『望月の欠けたることもなし、なんて』

望月の欠けたることも
なしと思えば
ああ　なんてつまらない
やれ　なんと味気ない

お月様ならいいけれど
人間様ではいかがなものか
ひとつやふたつの欠点は
そりゃご愛敬　そりゃご愛敬
例えるならば　かくし味
庭に風情の枯れ落葉
黒子で映える白い肌

庄屋（母親に）　いやいや、そいうものですぞ。

望月の欠けたることも
なしと思えば
ああ　なんてくだらない
やれ　なんと色気ない
お月様ならいいけれど
人間様ではたいくつせぬか
ひとつやふたつの欠点は
そりゃご同慶　そりゃご同慶
浮き世を渡る　処世術
八方美人は美人じゃない
才色兼備はねたまれる

望月の欠けたることも
なしと思えば
ああ　なんてつまらない
やれ　なんと味気ない
ああ　なんてくだらない
やれ　なんと色気ない

庄屋　それでは、よいご返事を待っておりますぞ。

庄屋と息子、退場。

母親　おまえ、どうなんだい。
娘　わたしは……。
母親　どうやらその顔では、あの息子のことがいたく気に入っているようだね。
娘（小さな声で）え、ええ。

母親　わたしも、あの親父様はともかく、息子の方はいい若者だと思うよ。じゃあ、この話、おうけするかい。

娘　はい……お願いします。

母親　でも、いいかい、おまえ。先方は気にしないといってくれたが。

娘　ええ、おっかさん、わかってます。

母親　できるだけ我慢するのだよ。

娘　ええ。

母親　お姑の前でついもらしてしまった嫁さんが、笑われたのを苦にして身を投げたなどという話もあるんだよ。

娘　まあ。

母親　話には続きがある。嫁様が死んでしまったのを悲しがって婿様も身を投げた。すると、嫁のおならを笑って死なせ、今度は息子まで死なせたといって、姑まで身を投げた。

娘　あれあれ、なんと。

母親　おならの一発で一家全滅。だから、たかがおならなどと侮っていると、えらいことになる。ましておまえのは、普通のではないのだから。

娘　はい。

母親と娘の二重唱。

『やっかいなものがどんどん』

小さい頃は小さかったから
笑いごとですんだけど
可愛らしい子猫が
どんどん大きくなるように
おまえの（わたしの）やっかいなものも
どんどん大きくなっていった
いまではもう猫でなく
虎を飼っているようなもの
放したら最後
暴れ回って手に負えぬ

小さい頃は小さいやつだったから

笑いごとですんだけれど
打上げ花火の筒が
どんどん太くなるように
おまえの（わたしの）やっかいなものも
どんどん太くなっていった
いまではもう花火でなく
大砲を据え付けたようなもの
火をつけたら最後
隣村まで吹き飛ばす

母親　いいかい、お尻に栓をしてでも、我慢するんだよ。
娘　はい、おっかさん。

2

庄屋の家。

姑（独白）　どうしたというのじゃ、嫁御の顔色が悪い。日に日に悪くなっていく。嫁入りした頃はほんのり紅色の桃のような顔だったのが、いまでは青白い。そのうえひどく汗をかいているし、体もだるそうだ。ときどき腹のあたりをなぜているから、もしや子供でもできたかと思ったが、まだ嫁入りして一月やそこいらだというのに、そんなに調子が悪くなるのもおかしい。あれはどこか具合が悪いのだ。

嫁（1場の娘）、上手より。

姑　嫁や嫁や。
嫁　はい、おっかさん、何かご用で。
姑　用事というのはほかでもない。わたしは心配しているのです。おまえ、このごろずいぶんと顔色が悪く、苦しそうだ。嫁にきたばかりで我慢しているのだろうが、どうかそれはやめておくれでないか。体の具合が悪いのなら、早く医者殿に見せるなり、休むなりした方がいい。変に我慢をしたば

かりに、取り返しのつかぬことになっては困るから。

嫁　いえ、その……。

姑　察するに、お腹がおかしいのではないのかい。

嫁　はい、あの。

姑　医者を呼ぼうか。

嫁　いえ、何でもございませんから。

姑　何でもないことがあるものか。おお、よくみればずいぶんと下腹が膨れているではないか。子ができてもそこまで膨れぬ。

嫁　子供ではございません。これが、こうなったわけはわかっておりますから。

姑　わかっている？　じゃあ、話してくれてもよかろう。

嫁　でも……。

姑　わたしたちは親子になったのではないかい。親に遠慮はいらぬ。

嫁　実は……。

姑　実は？

嫁　やっぱり言えません。

姑　嫁や、どうか言っておくれ。そうでないと、今度はわたしが心配のあまり体をこわしてしまう。

嫁　それは困ります。

姑　ならば話しておくれ。

嫁　……笑いませんか？

姑　笑いません。

嫁　では申し上げます。実は、おならが。

姑　おなら……あの、おならですか。

嫁　はい（消え入りそうな声）。

姑　まさか、おまえ、おならを我慢しているのですか。

嫁　はい。

姑　まあ、なんということ。そんなことで体をこわされてはたまらない。おならなんて我慢をするものではありません。どんどんおやりなさい。何か、たいへんな病いかと思ったら、おならとは（笑）。あらら、ごめんなさい。笑うつもりはなかったの。で

も、しつけがいいのも度がすぎるとね。

嫁　わたしのおならは、普通ではないので…。

姑　おならに普通も特別もあるものですか。さあ、心おきなくやっておくれ。

嫁、もじもじしている。

姑　ああ、そうだね。わたしが傍にいてはさすがに決まりが悪かろう。じゃあ、向こうへいってますから。

嫁　あの、おっかさん。お願いがあるのですが。

姑　はいはい。

嫁　耳に栓をしてほしいのですが。

姑　音を聞かれたくないというのかね、はい。

嫁　はい。それと、庭にあるあの石臼につかまっていてくださいますか。

姑　石臼に？

嫁　しっかりとつかまっていてください。

姑、訝しく思いながらも言葉に従って、庭の石臼につかまる。

姑　これでいいのかい。

嫁　ちゃんとつかまってますか？

姑　ああ、つかまっていますよ。

嫁　……では、失礼させていただきます。

嫁、少しかがむような姿勢。続いてドゴーンと轟音が。

姑　あれ、こりゃどうした！

姑、石臼と一緒に空中に。屋根の上に吹き飛ばされる。ドスーンという音。屋根の上で手足をじたばたさせる姑。そこへ庄屋と息子がかけつける。

庄屋　なんだ今のは、いったいなにがおこった。

息子　あれ、おっかさんがあんなところに。

庄屋　どうしたことだ。屋根に上って何をしてるんじゃ。

息子　それも石臼を持って。

庄屋　あんな重いものを持ってよく上れたものだ。

姑　たすけて、たすけて！

息子　おっかさんが助けを呼んでいます。

庄屋　ええい、はやく助けにいかんか。

庄屋、うろたえている嫁に気付いて。

庄屋　嫁や、あれは、どうしたというのだ。おまえは知っているのだろう。

嫁　はい、わたしのせいでございます。

庄屋　おまえの？　おまえがうちのばあさんを屋根に放り上げたとでもいうのか。冗談をいうものでない。そんなことができるものか。

嫁　いいえ、わたしでございます。わたしが吹き飛ばしたのでございます。

庄屋　いい加減にしないか。吹き飛ばすっていったいどうやって……。

姑、息子に抱えられておりてくる。腰を抜かしたようす。

庄屋　おお、大丈夫か。いったい、どうしたというのだ。

姑、庄屋に耳打ち。

庄屋　なに、おならだと！

嫁、恥ずかしさや申し訳なさに小さくなっている。

庄屋　嫁や、それはほんとうか。

嫁、うなずく。

庄屋　なんということだ。前もって聞いてはいたが、これほどすごいものとは思いもしなかった。まさに力風、屁の力風じゃ。しかしいくらなんでも、姑を屁で吹き飛ばすとは……。

庄屋が歌う。『ものには限度というものがある』

ものには限度というものがある
越えてはならぬ関がある
仏の顔も三度まで
腹は八分がちょうどいい
堪忍袋もつめすぎず
ものには限度というものがある
それを越えたらしかたない
それを越えたらそれまでだ

ものには限度というものがある
あふれてならぬ堰がある
過ぎたるは猶　何とやら
爛もぬるめがちょうどいい
恨み辛みは重ねずに
ものには限度というものがある
それを越えたらしかたない
それを越えたらそれまでだ

庄屋　嫁や、おまえをうちにおいておくわけにはいかん。

息子　おとっつあん、それはまたどうしてですか。

庄屋　どうしてだと！　この屁こき嫁はおまえの母親を吹き飛ばしたのだぞ。

息子　それはそうですが、屁のことは承知で嫁にもらったわけだし。

庄屋　ああ承知だったが、ここまですさまじ

いものとは承知してなかった。

姑　わたしのことなら、大丈夫だから。嫁を責めないでおくれ。わたしがするように言ったのだから。

庄屋　おまえたちが承知でも、世間は何と言う？　「庄屋のところの嫁は、姑を屁で吹き飛ばしたそうな」そんな噂はすぐに広がって、わしは道を歩けなくなるわ。

息子　しかし、おとっつあん。

庄屋　ええい、しかしも糞も、屁もないわ。わしがそう決めたのじゃ。嫁は里へかえすぞ。（嫁に向かい）よいな。

嫁、悲しそうな顔でうなずく。

姑も息子もつらそうである。

3

道。かたわらに梨の木があり、たわわに実がなっている。

馬方が三人。とめてある荷車には山のように荷が積まれている。

三人は梨の実めがけて石を投げているがあたらない。

馬方1　ちくしょうめ。

馬方2　だめだな、かすりもしない。

馬方1（馬方3に）　おまえ、ひとつ木に上ってとってこないか。

馬方3　おれがですかい？　いやあ、木登りは苦手なんで。

馬方1　おまえはどうだ？

馬方2　冗談じゃねえ、落ちて怪我でもしたらどうする。そういうおまえが上ったらどうだい。

馬方1　ちぇっ、おれができるならとっくに上ってるさ。しかし、何とかならんかな。ああ、うまそうだ。よだれが出そうだ。

庄屋と嫁、そこへ通りかかる。

馬方が投げた石が、そばへ転がる。

庄屋　おい、危ないな。おまえら、いったい何をしてるのだ。

馬方3　見てわからんかい。あそこの実をとろうとやっているのだが、何ともならんのだ。

馬方2　一休みしたが、どうにものどがかわいた。そうしたら、ちょうどうまい具合に梨の実がある。ひとついただこうと思うのだが、うまくいかんのさ。

庄屋　そうか、それは気の毒だ。だが、このじじいでは代わりにとってやるわけにはいかんでな。はい、ごめんなさいよ。

庄屋と嫁、その場を去ろうとする。

馬方1　おいっ、ちょっと待った。

庄屋　何だい。

馬方1　おまえさんじゃない。そっちの娘さんだ。

庄屋　娘ではない。うちの嫁……だった者に何の用があるのだ。

馬方1　嫁だか娘だか知らんが、今、おれたちの顔を見て、ふふんと小馬鹿にした笑い方をしやがった。

庄屋　なんだ、いいがかりをつけるのか。

馬方1　いいや、いいがかりではない。なあ娘さんよ、確かに笑ったな。

庄屋（嫁に）　おまえ、そうなのか。

嫁　はい、あまりにおかしかったので。

馬方2　な、何がおかしい！　おれたちの顔か。

嫁　顔もおかしいけれど。

庄屋　おいおい、よさないか。

嫁　大の男が三人もかかって、梨の実ひとつもげないのがおかしくて、つい。

馬方2　なんだと！

馬方1　ああ、確かにおれたちはだらしないかもしれん。だが、おまえに鼻で笑われる

のもおもしろくないな。おまえにあれがもげるというならまだしも。

嫁　あんな梨の実ぐらい、わたしなら簡単にもげます。

馬方１　ほお、大きく出たなあ。簡単にとはよく言った。そうかい、そうかい。ならばひとつやってはくれまいか。

馬方２　そうだ、そうだ。口だけなら何とでも言える。

庄屋（嫁に）　おまえ、何を言ってるんだ。（馬方たちに）いやいや、気を悪くされたのならわしが代わりにあやまる。どうか、からまんでくれ。

馬方１　からむだと。からんだのはそちらの方だ。（嫁に）どうかおれたちのためにあの実をごちそうしてくれんか。

庄屋（嫁に）　早く、あやまりなさい！

嫁　実をもいでやったら、何をしてくれますか。

馬方１　ふん、そうだな。よーし、ここにある荷物を全部おまえにやろう。

馬方３　あ、兄貴、そんな！

馬方２（馬方３に）　心配するな。あんな若い女にできるわけがない。

嫁　ほんとうに、その荷物を全部くださるのですね？

馬方１　ああ、おれは嘘はつかん。どうだ、一財産はあるぞ。

嫁　では、やりましょう。

馬方１　待て待て。それで、できなかったらどうするのだ？

嫁　できなかったら？

馬方１　そうだろう。賭けというものは、お互いが賭け金を出すものだ。おれは、この荷物を丸ごと賭ける。これをとられたら、おれは一文無しの丸裸だ。なのに、おまえの方は何も賭けないというのでは不公平というものだ。

嫁　あいにく、わたしはお金も品物も持ち合わせませんが。

馬方1　なあに、金でなくてもいい。どうだい、おまえさん自身を賭けたらどうだ。

嫁　わたしを？

馬方1　そうだ、おまえさんはなかなかの器量よし、賭け金かわりでもこちらには不満はないぞ。

嫁　それでは、もし、わたしが負けたら。

馬方1　そうよ、わしらが連れていく。

馬方3　ああ、そりゃいい。兄貴、そりゃいいぞ。

庄屋　馬鹿なことを！　さあ、早くあやまってしまいなさい。

嫁　もう一度聞きますが、ほんとうに荷物をくださいますね。

馬方1　くどいな。誓って約束は果たす。だがそちらも同じだぞ。あとで、すまなかったではすまないぞ。

嫁　やりましょう。

庄屋　よせ。よしなさい！　いくら里へかえす身とはいえ、途中でならず者たちに奪われたとあっては、先方に言い訳もたたぬ。

馬方1　ならず者とはなんだ。それに今、里にかえすとかいったな。訳はしらんが、ならばちょうどいいではないか。

庄屋　いや、それは……とにかく、あれは少し気が変なのだ。

馬方2　うるさい、じじいは黙ってろ。

馬方たちの歌う。『大口をたたいちまったら』

てめえで蒔いた種は
てめえで刈るもんだ
昔からそう決まってる
口は災いのもととは
よくいったもんだ
つるっとすべって怪我をする
その一言が命取りさ
だから　大口をたたいちまったら
そうだ　大口をたたいちまったら

てめえで背負うのさ

てめえで付けた火は
てめえで消すもんだ
昔からそう決まってる
言質をとられるとは
よくいったもんだ
うっかり預けたら損をする
その一言で文無しさ
だから　大口をたたいちまったら
そうだ　大口をたたいちまったら
てめえで背負うのさ

だから　大口をたたいちまったら
そうだ　大口をたたいちまったら
てめえで背負うのさ

嫁　では、よろしいですか。

馬方1　ああ、早いとこやってくれ。こちらもそろそろ出かけなくてはならんから。

嫁、梨の木のそばに寄る。

馬方3（馬方2に）　上るつもりかな。

馬方2　あの高さだぞ、それにあんな格好で上れるものか。

馬方3　そうだな、じゃあ、あのきれいな娘は。

馬方2　おれたちの……。

馬方2・3（同時に）　いひ、いひ、いひいひ、ひひひ。

嫁、いきなり馬方たちの方にふりかえると、着物の裾を少しめくる。

轟音。

馬方たち、庄屋、その場にひっくりかえる。同時に、梨の実がばらばらとふってくる。

馬方2　わっ、わっ、な、なんだ！

馬方１　いったい、いまのは。ええい、起きろ！

頭を抱え、ふるえている馬方３を蹴る。

馬方３　大砲だ、大砲だ。兄貴、逃げよう！

馬方１　馬鹿野郎、そんなんじゃ、ねえが……。

馬方２　あれを見ろ。梨の木の太い枝がぽっきり折れている。

馬方３　やっぱり大砲だ！　戦だ、戦が始まったんだ！

馬方１　ええい、黙れ！　大砲なんてどこにもねえし、戦なんかじゃねえ。だが……。

馬方２（馬方１に）　おい、これ（梨の実を差し出す）。

馬方１　あ？　ああ……。

嫁（庄屋を助け起こしながら）　さあ、梨は約束どおりもいであげましたよ。

馬方１　何だと、いまのは、おまえがやったというのか。

嫁、うなずく。

馬方２　嘘をつくな、おまえが何をしたというのだ。

馬方３　兄貴、じゃあ、雷が落ちたんだ。それで木をまっぷたつに……。

馬方１　雷なんかじゃねえ。

馬方３（空を見上げて）……そうだな。

馬方１　この娘が何かしたんだ。

馬方２　何かって、こいつはただ、木にむかって……。

馬方１　木にむかって尻を向けただけだ。

馬方２　待てよ。こいつが木にむかって、尻を向けた……変なことしやがると思ったんだ。その途端に。

馬方１　どかーんだ。

馬方３　尻を向けて？　尻を向けて何をするというのだ。まさか、屁でもくらわしたと

いうんじゃないだろうな（笑）。

嫁、黙っているが、そのようすから馬方１は確信。

馬方１　そのまさか……か？

馬方２　屁？　今のは屁なのかい！

馬方３　（声にならない）うーん、うう、うーん。

馬方１　屁の風で梨の実を落としたというのか、信じられん話だが……。

嫁　さあ、これだけあれば十分でしょう。

馬方３、梨を食っている。

嫁　さあ、梨を食べたら約束通り、その荷物をいただけますね。

馬方３　兄貴、ど、どうするんですか。

馬方２　おれには納得がいかねえ。こんな娘の屁でなんて。こりゃイカサマだ。きっと何か仕掛けがあったんだ。

嫁　仕掛けなんてありません。（馬方１に）約束は守るといったのに、あれは嘘だったのですか。

馬方１　そ、それは……。

馬方３　（馬方１に）　兄貴、こんなやつにかまわず、もう行きましょうよ。

馬方２　そうだ、そうだ。

嫁　こちらは女の身で恥ずかしいのを我慢して、梨をとってあげたのに。男らしくないんですね。

馬方２　何をこの女、言わせておけば！

馬方２、馬方３、嫁につかみかかろうとする。と、嫁がそちらに尻を向ける。

あわてて、馬方１が二人を止める。

馬方３　兄貴、なぜ止める。

馬方１　馬鹿野郎、あの娘の屁で吹き飛ばされたいか！

尻を向けているのに気づいて、馬方２、馬方３あわてて後退る。

馬方３　兄貴……。

馬方１　あきらめよう。

馬方２　荷を丸ごとくれちまうのか。せめて半分くらいでなんとか……。

馬方１　まともにくらったら、怪我だけではすまんだろう。おまけに女の屁に吹き飛ばされたと知れたら、死ぬまで物笑いの種にされちまう。ここは逃げるが勝ちだ。

馬方２　しかし……。

馬方１　お先に。

馬方１、その場から走り去る。あわてて馬方２も後を追う。少し、遅れて馬方３も。

馬方３　お、おい、待ってくれ。おれを置いていくな。

嫁は残された荷物を見て満足そうな顔。

嫁　さあ、おとっつあん。里ももうすぐ。わたしはもう一人で大丈夫ですから、これを持ち帰ってください。

庄屋　この荷物をか。

嫁　はい。

庄屋　これは、おまえのものだ。

嫁　今日までお世話になったお礼とおっかさんを吹き飛ばしたおわび。ぜひ、受け取ってくださいな。

庄屋　いや、しかし……。

弱っているところへ息子が現れる。

息子　おとっつあん、女房を里へ返すのはやめてくだされ。おっかさんも連れ戻してこいと言ってます。

庄屋　うーん、うん……わかった。戻るぞ、戻る。（嫁に）嫁や、どうか戻ってきてくれんか。なかなか、その屁……いや、そのなにも役にたつようだしなあ。

息子（嫁に）　戻ってくれるな。

嫁　戻っていいのですか。

息子、うなずく。嫁もうれしそうに。

庄屋　そうだ、よいことを考えた。嫁や、これから、その……あれをしたくなったら、裏の竹藪に行け。あそこなら大丈夫じゃ。あそこで存分にすればいい。

息子（荷車を見て）　これは、いったい、なんですか？

庄屋　それか、それはな。嫁が貰ったものなんじゃ。

息子　こんなに……誰がくれたのですか。

庄屋　まあ、いいではないか。

庄屋の歌。『どかんと弾けりゃ』

まったくこいつにゃ驚いた
びっくりしゃっくり
腰抜けた
やっかいものと思ったに
うまく使えば重宝だ
尻から吹く風　力風
幸せ運ぶ　力風
どかんと弾けりゃ
どかんと弾けりゃ降ってくる
棚の牡丹餅　雨霰

ほんとにこいつにゃ助かった
すっかりてっきり
覚悟した
あぶないものと思ったに
うまく使えば百人力
尻から吹く風　力風
災い転がす　力風

どかんと弾けりや
どかんと弾けりや逃げていく
鬼も金棒　置き忘れ

庄屋　さあ、戻るぞ。

4

庄屋の家の庭。
庄屋、姑、息子に嫁。村人たちも大勢つめかけている。
中央に旅芸人たちがいて、各々芸を見せている。技が決まると、大きな拍手。

芸人1　さあて、みなみなさまには、われら菊乃助一座の芸の数々、ごらんいただきましたが、最後にお見せする、ごらんいただきませしたが、最後にお見せする、いいや、お聞かせするのは世にも珍しい音曲芸。日の本広しといえども、これだけ見事に演じる者は他にはおりません。今までわたしどもが演じてきた芸など、これに比べればまるで屁のような、おっといけない、口がすべった。さあ、前口上はこのくらいにして、われらが菊乃助座頭によりますす妙なる調べをお楽しみくだされ。

座頭、もったいぶって登場。

座頭　ご当地のみなみなさま、誠にありがとうございます。我らのつたない芸でございますが、少しはお楽しみくださいましたでしょうか。では最後はひとつわたくしめの音曲でお笑いください。
ええ、まずは鶏の鳴声から。

そういうと座頭はくいと尻をつきだし、
ププ、プップー
と、おならで鶏の鳴声を真似る。

庄屋　あれあれ、なんとまあ（笑）。

村人１　おい、ありゃ、屁かい？

村人２　うん、そう思うが。

座頭　お次はウグイスでございます。

プー、プププ。プー、プププ。

庄屋、息子、嫁、村人たち爆笑。

村人１　おいおい、そりゃ、ほんものか。

村人２　誰かが陰で鳴らしてるんじゃないかい。

座頭　おや、イカサマとお疑いか、ならば、そこの方、こちらへおいでくだされ。

村人２、座頭のそばへ。座頭、村人２をかがませると、その顔のところへ尻を向ける。

村人２　よ、よせやい、何をする！

座頭　心配めさるな。音はするが、においはないわ。ほーれ。

プープープーププ、プープププ
プープープーププ、プープププ

座頭　どうじゃ、ほんものだろ。

村人２、あわてて戻る。みんな大笑い。

座頭　さあさ、ここまではほんの小手調べ。これからが本番だ。歌にあわせてやりましょう。ひとつ陽気にやりましょう。

座頭、芸人たち、そろって歌う。

『妙なる調べにのせて』

座頭、歌の合いの手におならを。その滑稽な姿と音に村人たちは大喜び。芸人たちにあわせて、村人たちも歌う。

ああ　なんと妙なる調べ

心も踊る調べよ
冷たい心も溶かしてしまう
こわばる顔も崩してしまう
長く　短く
高く　低く
空かけのぼる雲雀の声
朗々たる法螺貝の響き
大きく　小さく
また　大きく
さあ　千変万化の音色に酔えよ

ああ　なんと妙なる調べ
脇をくすぐる調べよ
沈んだ気分も浮かせてしまう
がんじがらめも緩めてしまう
長く　短く
高く　低く
森に棲む郭公の声
雅びなる竹の笛の歌
大きく　小さく
また　大きく
さあ　幽玄優雅の音色に酔えよ

歌い終わると、盛大な拍手。

庄屋（息子に）　うちの嫁も、ああいったやつができるといいな。

息子　な、何を言ってるんですか。

そこへ村人３が、あわてて駆け込んでくる。

村人３　庄屋様、た、たいへんだ！

庄屋　どうした？

村人３　ぬ、盗人だ。村中、荒らされているぞ！

庄屋　な、なに！

村人２　盗人だと！

村人たち、騒然となる。

村人１　みんな、ここへ集まっている留守にやられたんだな。

村人２　くそお。

村人３　まだ、そう遠くまで行ってないはずだ。

庄屋　よし、みんなで手分けして追いかけよう。

と、座頭がさえぎって。

座頭　お待ちください。余興はこれから盛り上がるところでございますよ。

村人１　何、言ってんだ！　もう余興どころじゃねえんだ。

村人２　おい、そこをどけ。おれたちゃ、盗人をつかまえるんだ。

座頭　いいや、そうはいきません。

他の芸人も村人たちをさえぎる。

村人１　何だ、おまえら邪魔するのか。

気がつくと、手に手に刀を持っている。

庄屋　おまえたち、さては盗人の仲間だな。

座頭　その通り。旅芸人は仮の姿、盗人稼業が本来だ。芸人を装って村に入りこみ、こうやって一所に集めてしまうのさ。後は誰もいないところへ仲間が忍び込み、悠々と仕事をするという寸法だ。

村人２　ふうむ、うまいこと考えやがった。

村人１（村人２に）感心している場合か！

座頭（実は盗人の親玉）　すっかり仕事を終えて仲間が逃げうせた後、われらもとんずらというのがいつもの筋書きだったが、今日は少し見つかるのが早かった。だから、悪いがあとは追わせねえ。

村人１　くそっ、そうはいくか。（村人たちに）おい、みんな、こわがることはねえ。こちらの方が大勢いるんだ。とっつかまえ

て、つきだしてやれ。

村人3　そうとも。

村人たち、盗人たちを取り囲む。

座頭（親玉）　待ちやがれ、あれを見ろ。

いつのまにか忍び寄った手下（盗人）の一人が、姑をつかまえてその首に刃物をつきつけている。

息子　おっかさん！

嫁　おっかさん！

親玉　いいか、わしらに近付くと、このばあさんの命がないぞ。

村人2　こ、この野郎！

庄屋　待ってくれ、うちのが。

庄屋がいきり立つ村人を押し止める。

親玉と盗人たち、勝ち誇ったように歌う

『村から村へ』

村から村へと渡り歩く
旅から旅の一座でござい
芸の数々　たっぷりと
ご覧に入れる　そのかわり
おあしの方も　たっぷりと
黙っていただく所存でござる
とんずらきめたその後の
後の祭りの間抜け面
見られないのが残念だ
誠に　誠に　残念至極

村から村へと渡り歩く
白浪稼業の一座でござい
手練の技を　じっくりと
堪能される　そのかわり
倉の中身は　しっかりと
残らずいただく所存でござる
霞と消えたその後の

口あんぐりの阿呆面
笑えないのは残念だ
誠に　誠に　残念無念

親玉　いいか、このばあさんを連れていく。あとを追うなよ。追わないとわかったら、一里ばかり先で放してやる。

芸人、いや盗人たち姑をひきたてるようにして行こうとする。

息子　おっかさん！

と、嫁が前に飛び出す。

嫁　待ってください。おっかさんの代わりにこのわたしを連れていってください。

親玉　何だと！

息子　おまえ、何を言いだすんだい。おっかさんのことを案じてくれるのはありがたいが、おまえが代わりだなどと。

庄屋（嫁に）　おまえ……もしや、あれを……。

嫁　はい。

庄屋　うまくいけばいいが。

嫁　やらせてください。

庄屋　それに……みんなに知れたら、恥ずかしくはないか。

嫁　いまはそんなことを言ってる場合ではありません。

庄屋　ああ、そうだ……では、おまえ、やってくれるか。

嫁　はい。

親玉　おい、こそこそ何を相談してるのだ。

庄屋　だから、この嫁がその年寄の身代わりになると言っているのだ。

息子　おとっつあんまで、馬鹿なことを！

親玉　いいだろう。逃げるのにも、こんな老いぼれでは何かと足手まとい。若い方が好都合だ。さあ、こっちへ来い。

嫁、親玉に近づく。

息子　待て、行くな！

庄屋、息子を押し止める。

親玉、嫁をつかまえると、姑をつきとばす。姑、よろけるが、息子や庄屋に助けられる。嫁、縄で縛られ、その先は手下の一人が持っている。

親玉　さあ、村のみなさま方よ。菊乃助一座の興行はこれにておひらき。お名残惜しいがお別れだ（笑）。いいか、あとを追うなよ。そんなことをしたら可愛い嫁御の命はないと思え。さあ、行くぞ！

嫁　ちょっとお待ちください。

親玉　なんだ。

嫁　しばらくあなたたちと一緒に行かねばならぬのですから、旦那様たちに一言挨拶ぐらいしたいもの。

親玉　挨拶だと！

嫁　いけませぬか。

親玉　気味悪いほど胆の据わった女だな。いいとも。さっさと挨拶でもなんでもしな。

嫁　おとっつあん、おっかさん、旦那様、これから、先だってお騒がせした、あの風を起こしたいと存じます。

息子　騒がせた……風？

嫁　お忘れですか。ほれ、おっかさんを屋根に吹き上げた。

息子　あーっ、あの屁の（庄屋に口をふさがれる）

嫁　それで、村のみなさまが怪我などされぬように、よろしくご指図ください。

庄屋　わかった、わかった。まかせておけ。

親玉　何をわけのわからないことを言ってるんだ。もう、いいだろう。

嫁　それではみなさま、ごきげんよう。

嫁が村人たちに頭を下げると、ちょうど尻が盗人たちの方を向く。

庄屋　みなの衆、伏せろ！

突然、庄屋が怒鳴る。村人たち反射的にその場に伏せる。
その瞬間、ドゴーンと轟音。
盗人たちは吹き飛ばされ、近くの木にたたきつけられる。
庄屋、姑、息子、村人たち、おそるおそる顔をあげる。

村人１　い、いったい、何がおきたんだ。

村人２　ものすごい音がした。

村人１　地面に押しつけられたぞ。

村人３　見ろ！　盗人たちがみんなのびていやがる。

村人２　よーし、こいつらを縛り上げろ！
それから仲間を追いかけるんだ。

村人、気勢をあげる。息子は嫁の戒めを解く。姑は嫁と抱き合う。

姑　ほんとうにおまえ、危ないことを。

息子　ほんとだ。うまくいったからいいようなもの。

庄屋　いやお手柄だ。よくやったぞ。

息子（怒って）　おとっつあん！

庄屋　しかし、まあ、おまえの屁の力風はたいしたものだ。

息子　しっ、村の連中は気づいていないのですから。

庄屋　いいさ、もし知られても、わしらが堂々としていたらいいのだ。うちの嫁は日本一の屁こき嫁でございますとな。

姑　おやめなさいったら。

庄屋、３場の『どかんと弾けりゃ』を歌い出す。姑、息子、嫁も加わる。村人や

他の出演者も加わり、大合唱に。

まったくこいつにゃ驚いた
びっくりしゃっくり
腰抜けた
やっかいものと思ったに
うまく使えば重宝だ
尻から吹く風　力風
幸せ運ぶ　力風
どかんと弾けりゃ
どかんと弾けりゃ　降ってくる
棚の牡丹餅　雨霰

ほんとにこいつにゃ助かった
すっかりてっきり
覚悟した
あぶないものと思ったに
うまく使えば百人力
尻から吹く風　力風
災い転がす　力風
どかんと弾けりゃ
どかんと弾けりゃ　逃げていく
鬼も金棒　置き忘れ

まったくほんとに　ららららら
やっぱりどっきり
ららららら
どうなるものと思ったに
まるくおさまり　めでたしさ
尻から吹く風　力風
世にも不思議な　力風
どかんと弾けりゃ
どかんと弾けりゃ
どかんと弾けりゃ
どかんと弾けりゃ

全員（声を揃えて）　どっかーん。

幕